

慶應義塾大学図書館蔵『十和田山本地』翻刻・解題(二)

須田 学

四段目

去ル程に迷ふ時ハ一念三千と成る、悟る時ハ三千一念の内に込めるとハ実事わりと聞へける、扱も南蔵ハつらく世路をくわんするに只世の中ハあちきなし、きのふハすくせ、けふハ現世、あすハ未来とするものを、日夜とんちんちの三とくにあじの法味をさまたげられ、此身を殺す哀さよ、我この姿に染なすも、しゆ生のくけんすくわんため、五十六おく七世にハ弥勒出世と聞からに、三恵の春の暁月に、ひらくる花のうてなに至り、正覚せん事うたかいなく、われ本くわひをミでん事うれしさよ、さらハ行脚に出べきと思ひ立こそふしき也、されハ有夜の事なるにいきやうくんして花ふりくたり、五色の雲たなびき明星天童子とけんじ、あま下らせ給ひつゝ、よい哉く、汝か心願成就せん、乍去難行苦行こけの行、かふを以てあるならハ、汝か住山定ムへし、先ッ熊野権現へ三

十三度のあゆミをはこひ、他念なく祈るべし、汝にあたひし宝珠のくとかふかしきなり、猶も行すへ守らんと、光をはなつて虚空コクウにあからせ玉ひける、こわ難有しと御跡三度伏拝ミ、夫よりも法印の御前に畏り、行脚の願ひ殊に熊野の権現へ参籠仕度御暇たひ給ひと申上れハ、法印聞召、いかにもあんきやハ出家の行、尤にハ思ひ共、我としおひて世にある事久しかるまじけれハ、最早寺政を渡さんと思ひしに、扱是非もなき次第哉、さわさりながら、とゞめんハ行法のさまたげ也、然らハ三とせの暇を遣し也、修行成就なすならハ、へんしも早くかへるへしとの玉ひて、いとまの三拝申つゝ、さらハくくと立出て、夫方家かたに入給ふ、父母に対面し御暇こひ被成ける、母上ハ御覧して、譬出家なすとても近き所におわすれハ(○)ちから也、我等かとしも老ぬれハ、いつかあい見んかなしやと、別れをおしミなけかるゝ、南蔵聞召、誠に御なけきさる事ながら、人間うへのはかなさハ草葉に宿る露方

も、もろき命の夢の世にいつ迄栄ひ申へき、うつゝら王か八万歳、東方朔か九千歳、我か朝の浦嶋太郎か七百余、歳ふるといへとも名のミ聞へし斗なり、天上の五すひ人間の八苦誰かまぬかれ申べき、前仏ハ出レとも後ぶつハ未夕世に出す、二仏のちうけん無益なれ共、ぼんのうもうぞふの雲にさそわれ、三途八難のくるしみこそなけひてもあまり有り、生者必滅会者定離あい別りくのかなしみこそかへすく御心得有べしとしはし語らせ給ひける、夫婦の人ハ聞召、あつとかん心一念ほつき菩提しん、難有御法たん我胎内をかし参らせ天上にせうぜん事のうれしさよと一首の哥にかく斗り、〱恋しさにあとをおくらのもミち葉にまた秋たらぬ鹿ぞ啼くかな、さらハく〱との玉ひハ南蔵御らんじ也、のり得て見れハ、雲あらハこそ是をかたみに立わかれ修行の旅に出らるゝ、是ハ扱置寢ニ又、八の太郎と申せしハ、八戸の城下方南にあたり十日市と申所に有徳なる仁有けるか、数多子共の其中におふじと申せしハ二八斗りの花娘、たくひまれなる美女なるか、扱も有夜の事なるに、さもいつくしき少人つま戸の影にたゝすミて、のふいかにおふじとの、君ゆへにこかれこかるゝあまお船、一夜かごとの櫂まくら、ほのめき渡る其苦をあけさせ給ひと音つれける、おふじ聞より、こわ自如きのしづのめに何の心のありて海ろかいもおよばんあら磯につりせてかへれ旅のとの、少人聞召、うらめしのことの葉や思ひかけはししのび来て磯のもくつとなるとても(〇)いとわぬあまのぬれこ

ろも(〇)つりせてかへるやうやある、たとはずしがの丸木ばし、ふみはつすとも諸ともに深き思ひにしつむ身に、かこと斗の御情、かわさぬ内はかへるましとつま戸にすかりくとくにぞ、おふじも今ハ恋衣色に出にけり花かつら蒼のこずへ咲染て、すへの松山波こさしとつま戸をあけて御手を取入らせ給ひと一間にしやうし未来を掛けてちきらるゝ、月日重り今ハはや懐胎とそなりにける、有夜しやう人申けるハ、いかに我妻よ、きのふけふとハ思ひとも春過夏もめぐり来て、秋の最中になりぬれハ、古郷の方もなつかしく、くわひ人ノ子誕生せハ定て男子なるへし、名をハ八の太郎と付てたべ、我住所ハ八太郎崎又も参らんさらハぞと立帰らんとし玉ひハ、おふじ袂にすがり付、こわうらめしの仰せやな、たとへ野のすへ山のおく、ゑぞか千鳥のはて迄も、ともにそわんと思ひしに、むごひつれないどうよくや虎とらふす野辺のすへ迄もつれさせ給ひと(〇)かきくときふししつミてそ泣居たる、少人聞召御身なけくハことわり也、さわ去りながら我住ミかへ連行んハかへつて(〇)いとふしき故、此上ハ何をか(〇)かくさん夫婦の中、替る姿を見すべしといふかと思ひハ(〇)たちまちに(〇)はたひろの大蛇となり黒雲に打乗て八太郎沼に入にける、おふじ大ニ驚きながら産月遅しと待けるハおそろしかりける事とも也、当る十月に成けれハ安く平産したりける、急き取上け見てあれハ、おくば前ばをがんとかみ、眼をくわつと見開き踊出たる有様ハ、さなから鬼神の如くなり、されとも母

ハかひく、敷ももりそたて、明しくらして居たりける、斯て光陰矢の如し、月日に閑守りなしとかや、八の太郎最早十七才に成にける、其丈タテけ八尺五寸にして、両眼ハ寒月の如くほう骨あれて、さうの髪さか立登り、力の程ハ奥しれす、常に好ムハ獺スズメ漁り、し、熊取てゑじきとなし、木こり山たち得手の道、力ためしのですもふ、古今まれ成荒もの也、所の者とも申やう、八の太郎との、さ程力量早わざにて近辺の小山にハ兔狸の類ひ斗り、外にせうはひになるべきし、もなし、我く、ハ毎年言分山へ渡世のためまたはきに参也、熊猪クマイノノたくひ多くあり、我等に友なひ参られよ、いかにくと申ける、八の太郎是を聞、大に喜び然らハ案内頼なりと三人打つれ急き山にもなれハ、式人のものハ山に分ケ入、八の太郎ハこやに残り居たりしか、猪ハ来るト小屋の辺りにて見廻す所に、弓手の山の沢伝へ、式正つれたる大の猪、きばをならしてかけ通る、八の太郎是を見て飛か、り彼し、をかいつかみ、岩に打付かふベミちんに打碎き片手にひつさけゆらりと立かへる、かゝる所へまたはき共、山方帰り此有様を見て、是ハ八の太郎との御手柄、さらハ料理をなしてたべ申さんと屯ひける、此者とも申やう、ヤア八の太郎との明日ハ貴殿にめしばん頼也、心得給ひと申ける、いかに承知いたし候、猶又あすハ猪をとり皮をはき在所のみやけになし申さんと夜のあくるをぞ待居たる、あくれハやかて山奥え分け入ける、かゝる折ふし一丈余りの大の熊三疋つれ、あれにあればぞかけ来

る、八の太郎是を見てあますまじと飛か、り、そつくひ擲んで投出す、式正の熊ハすきをあらせす飛か、り、つかまんとすれハかいく、り、さうをはらへハ投たる熊むつくとおき向ふさまに飛か、る、ねぢ殺さんとすれハ手の内方ひらりとぬけ、互にあらそふ其いきおひ、山も崩る、斗りなり、さしも八の太郎も大わらハに成りてこゝをせんと、戦モミあひける、今ハ八の太郎もこゝかしこを(○)くひさかれ(○)つかれはてたる有さまにて岩に腰かけ(○)ためいきついたる斗也、時にこのし、ずんと立てからくと打笑ひ、汝其ぶんの勇力にて我く、にハ及まじ、ちからを入かへ来るへしといふかと思ひハ、其形ち行方しれす矢やニけり、八の太郎大ニいかりエ、むねん口おしや、猪ハ扱置山かを廻る鬼女なりとも、取ひしかんと思ひしに、おくれを取のむねんやな、我生をかへても此うらみをさんぜん物をと天に向てさけぶ声天ハひさうの空にひ、き、地ハまた(○)こんりんなひてい迄聞ゆらんと谷のこたまの音そへて、おそろしかりしいきおひ也、やうくと心を押しつめ、よしなき猪イノに心をうばわれ今日の小屋番わすれたり、おし付かれら帰るべしと思ひ出して夫よりも本のこやにぞ帰りける、水をくまんと桶ヲひつさけ流の水を汐しほにける、折ふし岩なといへる川魚、ひれをのばして瀬を渡る、是ハ幸ひ我等も三人、肴も三疋けふハ得物も仕合悪し、酒の肴御ざんなれと大手をひろけ追廻シとらへて小屋に持かへり、くしにはさんでやきけるか、其かうはしき事何にたとへんやうぞ

なき、是ハどふもこたへらす、先ツ一疋しよくせんとおつ取  
てしよくしけるか、扱もうまし其味わひ甘露の如し、かれら  
に二疋ハあたへんと思ひしに、最早叶わす又一疋しよくしけ  
る、したいく其味わひ五胎にしみてたへかたし、残る一疋  
をもしよくせしか、後にハ大ニ咽かわき、汲たる水を吞ける  
か(○)のめともくあく事なく、汲上く吞程に、今ハはや  
手もたゆく清水にくひ付吞にける、され共かわきやまされハ  
後にハ川におりひたり、吞にしたかひとつと水かさまさ  
り川岸ハ四五間に掘うかつ、なをくたぎる其中にせまく  
ら立て吞けれハ、したひくにきしくつれ四五十間も水さか  
まき、岸打波ハはたをたきれひくたる有さま、すさま  
じかりける次第也、二人ノもの山方さかり此有様を見るより、  
こわ不思議なりと驚く所にハの太郎ぬつと出、ヤアいかにほ  
うばひたち、ケ様くの次第にて此山の主と成る、今宵の内  
に此山を立去り、古郷へ帰りおうぢや母にしらせてくれよ、  
急き高き岡に登り、我替れるかたちを見て里え帰りて物語り  
にせよと(○)言やいな、俄に山なりしんどうす、二人の者驚  
て取ものもとりあへす山路をこそハ出にける、あらすさまじ  
や其形チ、十丈余りの大蛇となり、眼ハ百れんの鏡の如く、  
つのハ深山の古木に事ならず、紅の舌を巻、ほつとついたる  
其いきわ、火ゑんと成て四方の山なり谷ひきしんどう雷で  
んいな光り、池方めう火もへあかり、一さんにやけ登る、彼  
大蛇踊くるうと見へけるか(○)いかつちの如くしんどうし、

しやちくの雨をふらしける、夜ひる三日か其内にかいまん  
くたるかたとなり、式十丈に石門をすへたるハ今の大瀧是  
也、此もの共の心の内おそろしきとも中く申斗ハなかりけ  
る

### 五段目

勸善懲悪ハ賢令のさんきやう也と古人のいふしも事わりなり、  
寔に野辺地の城主伊東の屋形にハ倅且弥うたれし事、四方に  
隠れのあらされハ、武膳聞より大ニいかり後悔すれともかひ  
そなき、郎等共を召集メ扱口おしき次第やな、是ハ其俣捨お  
かれす、其南蔵め安穩に置べきか、家来共用意せよ、我子の  
敵あますまじ、此度の供にハ岩原五藤太関屋の九郎召くさん、  
急けくと屋形を出、跡をもとめて追かけしハ無道也ける悪  
人なり、是ハ扱置、寔に又四の崎八力唯清ハ主人南蔵熊野山  
に大願あつて参籠ある、若寸善尺魔有もやせんと旅の用意し  
追付て御供せんと夫よりも、熊野路さして急きける、扱も南  
蔵ハしらぬ遠国はとうの旅、村々里く打過て、こぞ名に  
のミ紀の国の熊野路にさしかかり(○)とある所に宿をかり、  
しはらくやすらひ給ひける、夫方も毎日権現へあゆミを(○)  
はこませ給ひ、未来やうかう志願をみてしめたび玉ひとたん  
ぜひこらし祈なる、日数積て三十三日らひ拝を奉り、夫方  
なち山さしていそかる、四方を見渡せハ(○)かきりなき(○)  
すう山一べんの白雲ほう嶺によこたはり谷の水音せんくと

聞へ、梢を伝ふさるの聲、見上れ八百丈の空、山雲（くも）にそびひ見おろせば、あい煙りじんこくにおこつて四方におゝひ、たとり歩行て程もなく濱の宮にぞ付玉ふ、実やふたらく世界うじやうひじやう人非人に至迄すくひとらせ玉わんとの大じのひくわんぞ難有、弓手ハ川、妻手ハ海、親しらす子しらす、けん嶺難谷打過てなち山に入給ひ、げにや名高き觀世音、我大願成就なさしめ玉ひと御させひ有る、瀧つば二下りて見給ひハ、八十五丈の瀧ノ水、岩にせかれて糸の如し、実白糸瀧と古人のほめしも事わり也、三国一の御瀧屋に三十三日だんしぎにて行法有こそ頼もしき、是方やくら山にさしかゝり、数多の難所打越て本宮にそ付玉ふ、拜殿に入給ひ、けつかふざして行ひすまし、日毎に法花經誦ある、日数積て三十三日と申にハ権現あらわれ出させ給ひ、よひ哉く汝か志願ふかしき也、修行おこたる事なかれと杖（はらんじ）とはらゐて玉わりける、是此わらんじの切るゝ所ハ汝か栖山なるべけれ、猶も行すへ守らんと光をはなちて御てらの内に入玉ふ、こわ難有しと御跡三度伏拝ミ麓へ下向被成ける、夫より高野山を心かけ、たなべ越にさしかゝり、急けハ程なく高野山二分登りどうく院くふす拝ミ御坂を下らせ給ひける、かゝる所に六尺余りの大山伏、柿の衣ニ大太刀はき、金剛杖を横だへあたりをはらつて出来り、ヤア修行ハ法師のわざと聞、行かう積れる徳ハいかに、南蔵聞召おろか成りとよ（。）そも三界の大とうし世尊たもだんとくせつせん踏そめて、あらゝからゝにつかひ

てこそ三十どうでうとけ玉ふ、和僧様ハ修行のかういかなる仏の法を得る、山伏聞、ヲ、我行と申すハ大峯かつらき金峯山冥山冥谷行ひすまし、行力尊き其印飛鳥も祈りおとし、しゝたる者もよみかへす、御坊の法力にきやうくらべせん、南蔵此由聞召、其印見せ玉ひと申さるゝ、其時山伏法を結んで唱へければ忽ち火炙んもへかゝる、南蔵少もさわかず（。）しやすひの印を結んでかけさせ玉ひハ、ほのふハ其俣きへにける、山伏ハ猶もきとくを見せんと小高き所に掛上り、いらたか珠数を押もんで、先ツ神おろしをしたりけり、先一番にくらまの山の大天狗、あたこ山にハ太郎坊、大峯かつらき金不山、つくしにハそまか嶽がまん天狗にしやまん天狗、彦山嶽にくぜひ坊、箱根山にきり太郎、遠州秋葉の三尺坊、三河に八ツ橋ほうらひ坊、小田原さひじやうとうりやう権現、はるな山ニハ鉄五郎、ミやうき山の松本坊、あんば大杉大雲坊、出羽に羽黒の三呂坊、奥州岩手山にかくれなき源（げん）まく坊、中にもたのみ奉る大峯山行のうはそくせんき後き只今不思議を見せしめ給へと責にせめかけいのりける、アラふしきや四方の山なり谷ひゝき、しんとう雷てんおひたゝしく、雪ハまんくくと降積、山く谷く一たひに皆白妙に成にける、時に類イ異形のかたちのものあらわれ出、どつと笑ふて雪の下なる修行者いかにくと申ける、其時南蔵雪の下よりつゝと出、真言秘密のくじを切てかけ玉へ、天興く慈正く六根清淨はらひ給へとおんつへを以てこくうに向つてはらひ給へハ、ミ

とりのそらとはれにけり、其時山ふし手をあわせ、有かたし  
く名僧の法力ニテ三熱のくるしみまぬかれたり、弥勒出世  
のあか月迄守護神と成なんと、忽いつなの権現とあらわれ給  
へ、光りをはなつてこくうに上らせ玉へけり、ありかたしと  
こくうを拝しふもとに下られ給へける、是より大和廻りを志  
し、花洛をさして登らるゝ、是ハ扱置、野辺地豊前主従三人  
ハ

ほうく尋廻しに、道にてはたと行当り、ヤアせつかく尋る  
まやし、坊主念仏申せと追取まく、南蔵御らんし悪人に向つ  
て言へき言葉なし、弥陀の利剣と心に念じ、うらみあらハ心  
の俣に致されよと宝珠をむねにおし当て合掌してそおわしま  
す、豊前見るより我子のかたきと太刀を抜、丁と打ハ太刀ハ  
三本に折にける、すべき様なくあきれはて齒かみをなして立  
居たる、時に五藤太ちつと寄、高手小手にいましめ本国へ行  
んとひしめきける、かゝる所く六尺ゆたかの大の男駈来り、  
五藤太をかひ攔ミ、七八間なけ出す、南蔵かこふて仁王立に  
立たるハ心地よくこそ見へにける、おのれとほとくる繩のは  
し光明はなつておわします、大膳大にはらを立、いやおのれ  
らハ何国のごまの炭、子細有つて引立るを邪魔をひろく曲者  
め、打て捨んと罵りける、其時かの者からくと討笑ひ、イ  
ヤハヤ己等社盜賊也、どろほう共言に言れぬ悪党めら、虫同  
前の汝等、不便なから自めつを招くもの共の望に任せ、一  
くにしやはの暇も取らせんと、大太刀指物ひかへたり、そ

してものないわせそ打取つて三方を抜つれて打てかゝる時に、  
かのおのこ我おは誰と思ふそや、戸渡の家にかくれなき、四  
の崎八力忠清也、観念せよとよはわれハ、こハ叶ハしやと跡  
をも見すして逃行を、追駈追附けたとして、逸く首を打落  
し、主従悦び勇み立、都路さして登らるゝ、この八力か有様  
勇有儀有誠有とほめぬものこそなかりける

## 六段目

一心の明鏡を照し、三界の榮案を明す、衆生の迷、しやうと  
をすくわんと、御製願何うたかひの有へきに、扱も南蔵主従  
の人々ハ洛中に入給へ、先ツ大仏殿を伏拝ミ、夫方春日の宮  
拜礼有り、灵地靈山見廻りてとある茶やに腰を打かけし  
ばしやすらひ玉ひしに、南蔵の玉ひけるハ、いかに八力我ハ  
是方日本廻国に出る也、此わらんじのきるゝ所ハ我住山とな  
すべき也、汝ハ是方国本へ立帰り、両親え此由申達せよ、我  
故に多くの人を亡したり、百人の僧をしやうじ、師の法印を  
導師として追善をいとなミ、成仏とくたつの供養をなして玉  
われと八力に御暇給り陸奥さして下りける、南蔵ハ八力に立  
分レ、名所旧跡残りなく夫より丹波ちにさしかゝり伊賀へ廻  
りて、是そ此日本の柱と名高き伊勢の国にそ付玉ふ、伝へ聞  
女神男神のふとしき立て、国つ神とハなり給ひ、今の山田に  
神座有、其あらゝきの(○)宮つこの(○)はらひきよむるふと  
のつと、我国本の父母の寿命を守らせたび給ひとよう拝シ、

是方四国を心ざし鳥もかよわぬけん山をたとりくくとあゆませ玉ひつゝ、人里近く成にける、弓手妻手を見給ふに、此凶年に往來の盜ぞくの手にかゝり死人かひこつおかの如し、あらふびんの者ともやと回向をなして通らるゝ、かゝる所に山そくとも出来り、ヤア夫なる坊主たくわひあらハこなたへ渡せ、さなくハわんぼうぬきおけと声くくに呼わりける、南蔵聞召、我難行苦行に身をすつるも皆是しゆじやうの望を達せん為なるそ、衣ばかりハあたひべし、山そく聞てヲサ衣ハ此方もおしからず、早くわんぼうぬきあかれと両方立かりつひにいぜうを(○)はき取ける、頃ハ十月下旬の事なるにみぞりまじりにふる雪の寒気にはたへ氷り来て刃に当るに事なら□、かゝる所に六尺ゆたかの大山ふす、金剛杖を横たひゆらりくと出来る、とうぞくども是を見て、こりや山伏もらへためかあらふ置て行と申ける、山伏聞、ホ、汝等もぬすミためかあらふ、此方へ渡せ、山そく大ニ腹を立、いやこひつ(○)ふとしるし丸はたかにはき取て、菰かぶらせて通せやと一度にとつとわらひける、其時山伏一丈斗にのひあかり、金剛杖をおつ取のべ、はうりくとひしき付、大たん不敵の盜そくども、多くの人を切取し、往來のさまたけ諸人のなき助け置て八国のさわき、一く此世の暇をとらせんとかい擱ミ海へざんぶくとなけ込けるハ心ちよかりし有様也、時に山伏いしやうを取て南蔵へ参らせ、某をいかなる者と思ふらん、年月けい役なしつるいつなの権現我なり、猶く行す

へ守らんと、忽白狐と身をけんじ光りをはなつてうせ給ふ、こわ難有しと御跡三度伏拝ミ、夫方けんかん難こく打過て、土佐の国にそ入玉ふ、是方野根坂村にさしかゝり一夜借寝の草枕、名所旧地を御覽有、野根村にこそつき給ふ、日も黄紙時になりぬれハ、宿からはやと思召、長者四郎三良か家ニ立より給ひ、一夜の宿とこわせ玉ふ、亭主立出宿ハ叶ひ申まじ、脇方を聞れよとにかくしくそ申ける、南蔵御覽じうらめしの仰やな、はや日も暮て候へハ一夜あかさせたび給ひと軒にたゝすミの給ひハ、女房立出いや聞分もないやせ坊主、御身のやうな破れ衣、何を当とに宿かさん、はやく出られよと追立ける、南蔵ハすこくと長者か門を立出て、又有家に立寄一夜の宿との給ハ夫婦立出、見くるしくハ候へ共、旅の勞れをはらせ玉ひとしやうしける、何かな御ちそう申さんと種々にもてなし奉る、亭主申けるハ御僧さまハ国ハいつくに候ぞや、されハ我等ハ陸奥七崎村といふ所の者なるか諸国行脚に思ひ立て候、亭主重ねて申けるハ御僧様ハ定て四国辺路の思召ならん、是方先き野根坂と申て日本一の大難所登り四十里下り四十里峠に御番所有、されとも猪のし、狼数多く往來の人をなやまし候、殊ニ中段の岩穴に其丈け五尺余りの山犬すまひ、行來のものを取くらひ、往來今ハ留り候外、海辺を通らんにハはね石飛いしごろく石、親しらす子しらすなと大難所にて波にうたれて死する者かすしらす、此国の大守土佐守聞召、先ツ彼犬をたひじせんと大将に沢村平六兵衛仰

付られ、百騎の勢を玉わり野根村にかけ来り、八方よりせこを廻しかり出せとも、犬の形見得されは、彼柴薪柴を積ミ、火を付けければ煙り四方へ立まとへ、ゑんくくと天をこかしてやけ上る、さしもの犬こらひかね、しんどうらひでんして大木小木をかけたをし、山をうがつておとり出る、せこのものは是を見て、それあましな、おつとり取巻火水になつてかり立る、彼犬小高き所へかけあかり大音上てよバわるやう、我をバいかなものとおもふらん、大唐入まん国の大将かうりきはつかんと言ものや、日本へ打渡り切支丹にかたむけんとせし所に土佐守の郎等に本田の太郎宗綱にうたれ、其靈こんぼんのうの犬と也、汝等ハ扱置土佐一国をくひたをさんと思ふ也、といふや杯マや山谷に飛廻りあれにあれたる有様ハすさまじかりける次第也、平六兵衛夫是を見てあますなと下知をなす、せこの者とも承り候と弓やり長刀大刀刀得ものく引提く、八方方せめにける、されともじんべん不思議の犬なれハ、矢をいかくれ共矢柄ハくたけ、鏢ニて向ひハ(○)ほこ先キ立す、太刀も刃もみちんニくたけ、数多のせこも今ハはや、残りすくなにくひしかれ、今ハ大将平六兵衛こはむねんと太刀をぬき彼犬に立向ふ、其時山犬大ニいかり、エイおのれ只今思ひ知らせんと言方早く飛違ひ刀からミに引くわひ、はるかの峯にかけ上り、数千丈の谷底へ、一振ふつてかけ落せハ、みちんと成て失ニける、ケ様の事のミ候へハ、諸人のさうどう大方ならず、御僧さまもしはらく是に御逗留ましますて、世間のやうを御

覧あれと半時斗りかたりける、南蔵聞召、扱ハさにて候か、我等ハ本方世捨人の事なれハ、何か命のおしからん、彼故に多くの人のほろひし事、ふびんの次第めひどにさまようあわれさよ、我しゆしやうの為、其犬をたいじして往来のうれひをすくわんと玉ひハ、亭主驚き、のふく御僧さま数千の人力に及ぬ犬、何とてうたるへき、とまり給ひと申ける、南蔵の玉ひけるハ夫大しやうしやく尊ハ雪山に入らせ給ひし時、うへたる鬼人に身をあたへ、成道正覚なし玉ふ、叶わぬ迄も我行て、見申さんとの玉ひて野根坂さして急かる、斯てかしこになりしかハ、峠をさして登ける、ちうの程にて足をとめ、しはらくやすらひ四方のけしきを御覧有るに、実も聞しにまさる大山深山ゆうこく峩々とそびへ白雲おびニにて、山の腰をめぐる道めぐりてひづしの腹わたに似たりと古人のいふしも事わりやと、しばしかんじて立玉ふ、かゝる所へ俄に山なりしんどうし、穴の内方あらわれ出、わつと吠たる其上ハ、山谷にびゝきすさまじけれ、まなごをいからかし(○)きはをならして飛かゝる、其時南蔵少もさわかすしつして曰く、なんじか悪心汝を見る、ぼんのうそく菩提しん、南無めう星天とくわんねんして御杖を以てうくと打給ひハ、不思議やたちまち白骨と成り、こんちきの玉こくうに上り、難有や名僧の法力にてちく生道をまぬかれて成仏の身となり本国へ帰る也と雲の内にそ入にける、亭主ハ跡方付て来りしか、此有様を見てかふるひきみにめいじける、村の者共おひく



にかけ来り、拜むやら悦ふやらざゝめきわたる有様ハ尊とか  
りける次第也、亭主頓て御供申、我家へともなひ奉る、近国  
他こく此よしを聞伝へくゝいざや参り御拜まんと我もくゝと  
老若男女きせんくんじゆして拜ミける、庄屋此よし言上す、  
土佐守聞召御まびハ限りなし、家来金沢源馬源馬を使者として御  
布施を送らるゝ、玄番南蔵に对面畏て申けるハ、主人土佐守  
申入、ハ野根坂の变化御したかひ下さる段まび是に過す候。(。)  
幸手前祈願所に頼上しやうたひ仕度候御来りん奉願るといん  
きんにのへにける、南蔵聞召、こ忝き仰にて候、さりながら  
愚僧義ハ行脚の大願思ひ立候へは、未だ住しよくハ仕らす、  
本方寺院ハ望なく候、驪ことニハに此御布施もひんなるものにあたへ  
玉われと受させ玉わす、玄番承り、扱もきとくの名僧かな、  
立て申も恐れ有と御いとま申上、城中へ立帰り右次第を申上  
れハ、土佐守聞召、あつはれおしき名僧や、此上ハぜひもな  
し、然ハ宿の清兵衛を召べしと頓て使を立らるれハ、清兵衛  
急き来りける、国主の御前へ召出し、汝親かうくゝの上、冥  
加に叶ひ名僧を宿かし参らせ、野根坂の变化事ゆへなく相し  
つめま悦是に過す、此しやうとして五拾石永代にとらす也  
と頓て御判を下さるゝ、難有くゝと我住村へ立帰る、是ハ扱  
置いせん宿をこわせ給ひしに、かし参らせすあつかう申せし  
四郎三郎夫婦の者、いよくゝ悪心やむ事なく田地をむたひに  
かすめ取、家来の者どもむこくなし、ばひくゝに高利をとり、  
人にほどこしかつてなし、あかしくらして居たりしか、有時

四郎三郎申やう、先頃宿かりんとせし道心か野根坂の犬を殺  
したハ難有たひとて、遠国他国のもの迄も拜ミに参る、なん  
ととていらざる錢をまきちらし、つめにもなれハ我前にて畳  
に頭をすりつけてくるしむ、其参錢にて酒でもかのんだら。(。)  
よかるふに不心得なる者どもやと顔をしかめて申ける、され  
ハ有夜の事なるに夫婦しん所に入けるニ、夜も深更ニかたむ  
きしか女房わつと声を立、踊上てくるひける、あるじハ驚き  
むつくと起て見てあれハ、両の耳方蛇ハ出、首をくるくゝと  
引まとひ、眼をくわつと見開きしハすさまじかりける次第也、  
四郎三郎はつと立方引はなさんとしけれども中くゝはなれず、  
兎角うろつく其内に、又ひたひに式尺斗の角出たり、眼くら  
ミてはひ廻るハ浅ましかりける事とも也、悴五六此よしを見  
て、こわ何事と立さわく、四郎三郎申けるハ、いかに五六急  
き清兵衛方に逗留有名僧へ参り、此くけんすくひ玉われ、金  
錢ハ何程モしんすべしと申入れ早く連て来れよと申けれハ、  
五六取ものもとりあひず清兵衛方へそいそぎける、かくて宿  
にもなりしかハ、南蔵の御前に参り親の口上申ける、南蔵聞  
召、夫ハふびんの次第也、さりながら天のなせる罪なれハ、  
我等か智恵に及難し、去ながら悪心にて持たくわひたる金銭  
を諸人にほどこし有ならハ、少々ハ浮べしと仰ける、五六ぜ  
ひなく我家へ帰りさまくゝ善事をなしにける、今か世迄もへ  
び塚鬼つかとて有とかや、南蔵ハ亭主に近付玉ひ、長くゝ逗  
留世話ニ預る事いんねん有事と覺たり、さらハ御暇申さんと

立出給ひハ、亭主ハ御名残をおしミけるハ、扱此参銭ハ如何  
仕らん、南蔵聞召、其金銭にて寺を建立し釈迦如来ほぞんと  
し、次に三十三観音をぶつし奉り、猶としんぐ申されよ、  
女房ハ女なからも古今まれなる行孝人、末世に名を残し得さ  
せん、御身か名を山名ニ亭主か清の字を入、我南の字を加へ、  
小倉山南清寺と御自筆ニあそばし、亭主にこそハ給りける、  
難有しくと三度頂戴仕り甚ひ事ハ限なし、さらハ暇との玉  
ひハ夫婦を始数百人、御袖に取すかり別れをおしミ泣なけく、  
物ニよくくたとふるに如来入滅メツの折からに五百羅かん十六  
らかん五十式類クイひの集りて、別をしたふ有さまも是にハいか  
てまさるべき、せひもなくく御供数し十里送り奉る、是方御  
暇申、本所く立かへる、此御僧の御法徳、只正身のいき  
仏、実肉身の菩薩なるハとかんぜぬものこそなかり覺